

1 条件設定に当たって

日常的な話す・聞く活動が、思考力・判断力・表現力をはぐくむ話す・聞く活動となるためには、以下の三つの前提を意識した活動が重要であると考えます。

- ・自分の思いや考えを伝え、理解してもらうこと
- ・友達の思いや考えを聴き、理解すること
- ・自らの思いや考えの変容を自覚すること

これらを前提としたのは、日常的な話す・聞く活動においても、まず個々が自らの思いや考えを明確にもち、互いの思いや考えを交流する必要があるからである。また、その交流は、一方的なものでなく、伝える側と聞く側のどちらの立場も大切にされなければならない。つまり、双方向での話す・聞く活動となり、自分の思いや考えをもち相手の思いや考えを「聴く」(後述)ことができれば、互いの思いや考えを比較したり、自らの変容に気付いたりすることにも繋がっていくと考える。

4月、上記三つの前提を踏まえ学級の子どもに目を移してみると、前提として考えるそれらのどれ一つとして十分にできていない現状があった。自分の意見を友達に伝えるという意識がない子ども、相手の話を理解も質問もせずにそのままにしておく子どもなど、一方通行の話す・聞く活動であった。

前提とする上記の三つを満たす子どもの姿をめざすとともに、研究主題に迫るため、テーマを「互いに理解し合う中で自らの思いや考えをとらえなおす伝え合い・聴き合い」と設定した。

テーマにある「思いや考え」とは、子どもが学習の中で個々に抱いたりもったりするものである。日々の学習において、その思いや考えは、発言したり書いたりすることで表出されるが、子どもは様々な思いや考えを表出する際に正解・不正解にこだわる。それらにこだわるのではなく、思いや考えによって自分の立場を明確にすることが大切であることを共通理解し、「わからない」「自信がない」という思いも含めて、学習を進める上での重要な「思いや考え」とする必要がある。

「互いに理解し合う」とは、自分の思いや考えを理解してもらい、相手の思いや考えを理解するという双方向の理解である。双方向での理解に至るには、必要なことが二つある。一つは、相手に伝えよう、理解してもらおうと意識して話すことである。思いや考えを一方的に話したり、話した行為だけに満足したりするのではなく、相手に合わせて話し方を変えたり、説明し直したりする必要がある。もう一つは、相手の思いや考えを分かろう、理解しようとして聴くことである。ただ「聞く」のではなく、相手の意図することを掴もうとする態度も併せもつ「聴く」であることが大切だと考える。つまり、相手の話を聞き流すのではなく、自分の思いや考えと比較し、質問したり、確認したりしながら、相手の言いたいことを受け止める「聴く」を大切にしたい。

「とらえなおす」とは、初めの思いや考えに比べ、より理解が深まり自分の思いや考えを確かなものとするものである。学習に参加している以上、学習後の思いや考えが、最初の思いや考えと全く同じであることはないだろう。曖昧であった思いや考えが、学習の途中や終わりでより確かなものになったり、全く違ったものになったりする。一方通行でなく双方向での伝え合い・聴き合いを「互いに理解し合う中で自らの思いや考えをとらえなおす伝え合い・聴き合い」と考える。

以上のことを踏まえ、テーマに迫るためには、以下の三つの条件が必要だと考えた。

- ・条件A 自分の思いや考えの根拠を明確にもつ
- ・条件B 自分と相手の思いや考えを比較する
- ・条件C 相手の思いや考えを受容し 自らの思いや考えをとらえなおす

2 条件について

- ・条件A 自分の思いや考えの根拠を明確にもつ

課題に取り組む中で、自分の思いや考えとその根拠を明確にもっていないければ、自分の思いや考えを相手にわかるように伝えることができない。そして、相手に自分の思いや考えを伝えるためには、極端に言えば、分かっていない相手の数だけ再度説明する必要が出てくるだろう。しかし、自分の思いや考えの根拠をもたず、十分な説明ができない子どももいる。

根拠を明確にもっていない場合はその説明にズレが生じ、相手に伝えるために繰り返し説明(言い換え)

をする中で考えには揺れが生じてくる。逆に、自分の根拠を明確にもっている場合には、同じ考えをもつ友達の発言に加えて説明をしたり、理解していない友達に説得力のある説明をしたりできる。子ども一人一人が自分の考えの根拠を明確にもつことは、互いを理解し合う上で重要である。

・条件B 自分と相手の思いや考えを比較する

同じ課題に取り組んでいても、一人一人が抱いた思いや考えは異なる。つまり、一時間の学習において、子どもは友達の多様な思いや考えに触れ学習しているのである。その多様な思いや考えを基に学習が進められる中で、自分と相手の思いや考えの共通点・相違点を見付け、比較しながら聴くことが大切である。自分と相手の考えを比較しながら伝え合い・聴き合いをするということは、最初の思いや考えに比べより理解が深まり、自分の思いや考えを新たにしたり、確かなものとしたりしていくことに繋がっていく。

・条件C 相手の思いや考えを受容し 自らの思いや考えをとらえなおす

相手の言いたいことを分かって、分かりたいと思って聴いている子どもはどのくらいいるだろうか。相手が言ったことを「聞いた」だけで「分かった」つもりになっているが、実は理解できずにそのままにしている子どもが多くいる。その中には、「分からない」という一言を発言することができず、黙ってしまう子どもも含まれている。相手の言いたいことを受け止めることは容易ではないが、相手に対する質問や確認を何度も繰り返しながら、相手の思いや考え、その根拠をしっかりと受け止め理解していくことが必要である。

相手の思いや考えを理解することは、自分の思いや考えを見つめなおすことに繋がっていく。学習の前後や学習途中での自分の思いや考えはどう変化したのか、どうして変わらなかったのか、といった友達の思いや考えによる自分自身の変容に気付くことにより、自分の思いや考えを深めたり、新たな学習の仕方や見方、考え方などを獲得することにも繋がっていく。

3 おもな実践

先に述べたテーマに迫るため、三つの条件を設定し、その条件に対する手だてをもち実践を進めてきた。同時に、実践に取り組むにあたり、学習の土台づくりとして「学級づくり」「授業づくり」の側面から、以下の六つにも意識的に取り組んできた。

- ・自己意識を高める
- ・相手意識を高める
- ・協働意識を育てる
- ・他者理解の意識を育てる
- ・追究意欲を高める
- ・言語感覚を高める

図1のように、中心にあるテーマを支えるのは、各条件の手だてとした五つ(後述)である。さらに、土台となるのは、上記の六つの意識や意欲、つまり、学級づくりと授業づくりによるものと考えられる。

以下、学習の土台づくりの観点も含め、条件ごとに、各教科等での実践について述べていく。

・条件A 自分の思いや考えの根拠を明確にもつ

(1) 条件Aの手だて

① 共通の課題への全員での取り組み

学習の一時間毎には、必ず課題が書かれている。しかし、子ども全員がその課題に向かって取り組んでいるかと言えば、そうとは言えないであろう。見た目には一緒に話し合いをしている「つもり」であっても、実際には話し合いに参加していない子もいる。そこで、一つの課題に対して、クラス全員で一緒に思いや考えを出し合うのだという意識を高めるとともに、子ども一人一人が自分の思いや考えをもてる課題をつくり出していく。

② 手だての強化～思いや考えの支えとなる根拠の探し方～

子ども全員がその課題に向かって取り組んでいても、自分の思いや考えの根拠を探せず発言に至らない子がいる。そこで、根拠を探す際の着眼点を日々の学習において見付け、蓄積していく。また、既習や経験などを根拠として自分の思いや考えを説明できることも意識付けていく。

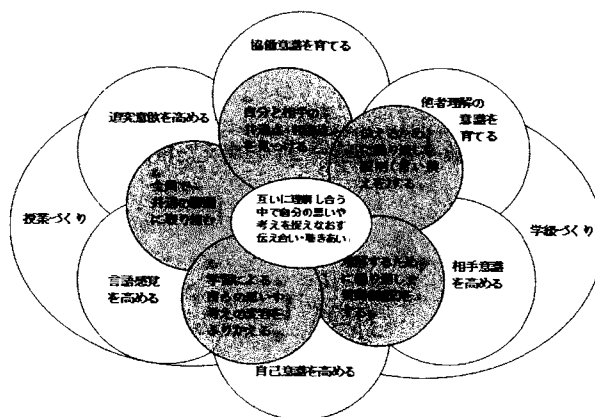


図1 学級・授業作りとテーマとの関係図

(2) 国語科「ありの行列」における実践

説明文「ありの行列」の読み取りを進める中で、〈問いは何か〉〈ウイルソンはどんな実験をしたのか〉〈はじめの実験では、ありはどんな様子か〉など、一人一人が課題に対する自分の思いや考えをもち、全員で共通の課題に取り組んできた。しかし、思いや考えをもっていても、自分の考えの根拠となる段落や文を見付けられず、どのように説明すればよいのかがわからない子どももいた。

そこで、説明文を読み取る中で、根拠を探す際の着眼点(アイテムと呼ぶ)を学習後に振り返ることにした。アイテムとして、主語や述語、修飾語、指示語、接続語、文末表現、順番などが抽出された。それら抽出されたものをノートや教科書にメモで残し、次の学習でも意識できるように可視化した。

これらのアイテムに目を付けることにより、自分の思いや考えの根拠を見付けることができるようになり、自信をもって発言する子どもが増えてきた。また、自分が見付けた根拠を基に、説明がうまくできなかった友達や不十分な友達に対して補足説明をすることができるようにもなってきた。子どもは、アイテムの活用により自分の思いや考えの根拠を明確にもつことができたと同時に、アイテムを活用するよさを実感していた。

〈実験と観察はいくつか〉の学習では、「自分の思いや考えの根拠を明確にもつ」ことにより、伝える側の思いや考えが、聴く側の思いや考えを左右するような伝え合い・聴き合いとなった。

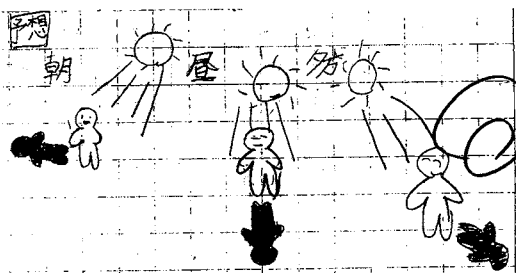
学習の初めには、課題に対する考えが大きく二つに分かれた。「実験一つ・観察二つ」と考えた子どもが

三段落には「はじめに」、四段落には「つぎに」とあるから、実験は二つで観察も二つだと思います。
砂糖を置いた実験とその観察、石を置いた実験とその観察です。

資料1 「実験二つ・観察二つ」と考えた根拠

三段落で砂糖をおいた実験をして、四段落はその続きだから、実験も観察も一つだと思います。
砂糖を置いてありの行列ができたところに、石を置いたからです。

資料2 「実験一つ・観察一つ」と考えた根拠



資料3 A児の予想図

33名、「実験二つ・観察一つ」と考えた子どもが1名である。しかし、それぞれの根拠を基に意見交換が行われた結果(資料1, 2), 「実験一つ・観察一つ」と考えた子どもが5名にまで増加した。

変更した子どもに理由を尋ねると、初めは「実験二つ・観察二つ」だと思っていたが、「実験一つ・観察一つ」と考えた友達の理由を聴いて、納得できたからと答えた。

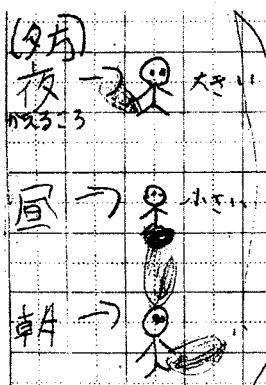
このように、説明を聴いていた友達の思いや考えまで変えることができたのは、1名の子どもが、自分の思いや考えとその根拠を明確にもっていたからだと言える。

(3) 理科「かげと太よう」における実践

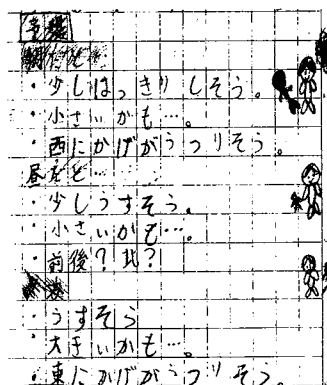
〈時刻によって太陽の位置とかげの向きはどうちがうか〉の学習では、これまでの自分の経験を根拠として予想を立て、意見を交流していた。

例えば、A児は、資料3のように予想図をかいた。これは、「影の向きは、朝と夕方とは逆になっている」と日々の生活の中で感じていることを基に予想したものである。また、B児は、資料4のように予想図をかいたが、これは学校にいる時間や登下校の際の影を基に予想したものである。帰る頃になると影が大きくなり、昼、学校にいる頃には影が小さい。朝については自信がないようだが、小さくて夕方と反対側に影ができると予想していた。さらに、C児は、資料5のように日々の生活の中から、影が薄くなったり濃くなったり、小さくなったり大きくなったりしていることを含め、方位を考慮して予想していた。

この予想段階では、考えの根拠が友達のそれとは異なっていたことで、自分の考えを発言することができた子どもがいた。予想後の実験では、全員で実験方法を考え、課題の解決に向かって取り組むことができていた。



資料4 B児の予想図



資料5 C児の予想図

以上のように、予想を出し合う学習は、自分がこれまでに習ったことや知っていること、見たことなどを基にして予想し、それらを根拠として自分の考えを説明する学習となった。また、各自の思いや考えの違いは、その根拠の違いであることにも触れることができた学習であった。

・条件B 自分と相手の思いや考えを比較する

(1) 条件Bの手だて

① 自分と相手の共通点・相違点への着目

自分と相手と比較しながら伝え合い・聴き合いをするときに、観点をもっていなければ学習は深まっていけない。どのように違うのか、なぜ違うのかなど、観点をもって相手の話を聴くことで、自分と相手の思いや考えを比較することができる。そこで、共通しているところ、異なるところは何かを探しながら聴くために、学習の中で観点を明確にもたせるようにする。比較する観点をもつことができれば、聴き方が変化し、相手の思いや考えに対して質問や確認などができるようになると考える。

② 手だての強化～学習における立場の確認～

自分と相手と比較しながら聴くことを促すために、自分の思いや考えが誰と同じなのか、違うのかといった学習における自分の立場の確認を取り入れる。それは、自分の意見がはっきりとしている子どももいるが、迷っていたり、よくわからず困っていたりする子どももいるからである。そのため、「わからない」という思いも大切な意見として取り上げ、各自の学習における立場を明確にしていく。

(2) 国語科「ありの行列」における実践

説明文「ありの行列」の〈実験と観察はいくつか〉の学習では、課題に対する考えが大きく二つに分かれた。「実験二つ・観察二つ」と考えた子どもが33名、「実験一つ・観察一つ」と考えた子どもが1名である。しかし、課題に取り組み始めてすぐに、このような結果にはならなかった。

課題について考えた時点では、「実験二つ・観察二つ」24名、「実験一つ・観察一つ」1名、そして、「わからない」9名であった。「わからない」と答えた9名は、初めの確認の時点では、決定的な根拠がなくて迷っていたり、はっきりしない部分があり確定できなかったり、実験も観察も二つ以上あると考えていたため言えなかったり、自分の思いや考えを明確にもつことができていなかった。そこで、「実験二つ・観察二つ」の24名と「実験一つ・観察一つ」の1名の主張に耳を傾けてみた。特に、「わからない」と答えた9名には、自分の思いや考えと同じところ、違うところを比べながら聴くことを促した。すると、双方の主張を聴いた後の立場の確認では、「実験二つ・観察二つ」33名、「実験一つ・観察一つ」1名という結果へと変化が見られた。相手の思いや考えを聴いて自分の思いや考えが変化することは、後述する条件Cにも繋がっていくものである。

この学習を通し、『わからない』って言えてよかった』『わからない』から、『わかる』になった」と、自分と相手の思いや考えの比較から自分の変容にも気付くことができた。また、「わからない」と言うことは、学級全体で学習を進めるにあって、重要な意見であり、学習を深めるきっかけとなることにも改めて気付くことができた。

(3) 総合学習「つながりの中で生きるぼく・わたし」における実践

3年生では、上記テーマの下、「つながり」を重視した活動を行っている。一学期には、まず学年の友達とのつながりに重点を置いた活動の場を設定してきた。学年全体でゲームや英語を使った活動などを行い、楽しみながら学年の友達とのつながりを意識させようと考え学習をスタートさせた。

本時では、「学年全員が友達か」「学年の中に話したことがない友達がいるか」「友達を増やしたいか」など、学習の導入時に各自の立場を確認することから始めた。立場を意識させた後、課題〈学年の友達を〇〇ふやそう〉の下、学年全員で英語を使った学習を行った。課題の「〇〇〇」には、「もっと」「たくさん」「5人」など、個々の立場にあった言葉を入れることにした。

この学習では、多くの友達と話したり、活動したりできるように、グループ作りに時間を掛けて活動を行った。このグループ作りには、三つのルールが設けられている。一つ目は、3クラス各1名ずつの3名のグループにすること。二つ目は、男女各1名以上が入ったグループにすること。三つ目は、作り直しでは先のグループと別の友達と一緒にすることである。

実際にグループ作りをしてみると、なかなか上手く相手を見付けられずに困っている子どもが何人もいた。しかし、何度もグループ作りを繰り返す中で、早くグループを作ることができる友達がいることに気付く子どもが出てきた。そこで、早くグループを作ることができる友達にこつを尋ねてみると、D児は、言われた人数のグループを作るため、自分から声を掛けている

・私は、自分から声をかけていなかったけど、Dさんのように自分から声をかけてみるとすぐにグループができました

・Eさんは、男女関係なく声をかけていてすごいと思いました。私もまねをしてみると、すぐに仲良くなれました

資料6 総合学習のふり返し

ことがわかった。また、E児は、目の前に来た友達に男女関係なく声をかけていることがわかった。すると、「なるほど、そんな考えがあるのか」と、すぐに教えてもらったことを実践する姿が見られた。学習後は、D児やE児などと自分を比較した振り返りが多く見られた（資料6）。

このように、グループ作りでも、自分と友達の違いに目を向けることで、その思いや考えの違いを比べ、自分ができていなかったことやしていなかったことに気付くという経験をすることができた。

・条件C 相手の思いや考えを受容し 自らの思いや考えをとらえなおす

(1) 条件Cの手だて

① 伝えるための繰り返し説明（言い換え）

子どもは、課題に対する自分の思いや考えを発言するだけで満足してしまうところがあり、その発言は相手に届いていないことが多い。相手に伝えようと思わず、分かってもらおうとも思わず、ただ言葉を発しただけだからである。相手に自分の思いや考えを伝え、伝えられて初めて伝え合いをしていると考えると、相手に伝えるために、根気よく、繰り返し説明（言い換え）することが必要となる。そこで、ペアでの説明やグループでの説明、課題別やテーマ別での説明、さらに全体での説明と、互いの思いや考えを伝え合い、聴き合う中で自分の思いや考えをまとめたり、深めたり、新たにしたりするような学習形態を取り入れていく。

② 理解するための繰り返し質問（確認）

相手の思いや考えをしっかりと受け止めて理解するときには、質問や確認が必要である。それも、相手の話を聴いた上での質問や内容の確認が大切になってくる。そして、相手の話を聴いて質問や確認を繰り返し行うことが、互いの思いや考えを交流しながら、全員で問題を解決していくことに繋がる。また、相手の思いや考えを理解していれば、友達の説明を別の友達が続けて説明したり、途中で説明者を交代して説明したりすることもできる。そこで、相手の考えを理解するための質問や確認のモデルを授業者が示し、繰り返し質問や確認をさせることによって、子ども自ら声が出せるようにしていく。

③ 自らの思いや考えの変容の自覚

友達の思いや考えを聴き、受け止めながら、相手を意識した学習を進める中で、自分の思いや考えにも変化が現れてくる。学習の中での自らの変容を何となく自覚している子どももいるが、多くは自覚しないまま学習を終えている。学習のまとめだけでなく、伝え合い・聴き合いによって自分自身の思いや考えがどう変わったのか、自らの変容を振り返る必要がある。そして、友達との伝え合い・聴き合いによる自らの変容に気付くことは、次の伝え合い・聴き合いへと繋がっていくと考える。そこで、自分の思いや考えがどのように変化したのか、誰の意見によって変わったのかを、振り返りに盛り込むようにさせる。さらに、学習の中では、「わかった」「まだわからない」と相手の思いや考えを聞いた後の状態を確認させて、自らの状態を振り返り易くさせる。

④ 手だての強化～説明に用いる言葉の選択～

思いや考えを伝え合い・聴き合うためには、個々の言語感覚や語彙力が重要である。それは、言いたいことを伝えるためにも、相手の説明を十分に理解するためにも欠かせないものである。しかし、子どもが自分なりに考えて選んだ言葉では、十分な説明ができないことがある。そこで、伝え合い・聴き合いをする際には、授業者が、適宜、言葉の理解を確認したり、言葉を補ったりして、子どもが自分の思いや考えを最後まで伝え、相手が理解できるように促していく。また、説明の中の主語や述語、指示語についても、授業者が確認したり詳しい説明を求めたりして、共通理解を図っていく。

(2) 国語科「ありの行列」における実践

説明文「ありの行列」の実践では、伝えるための繰り返し説明（言い換え）や相手の考えを受け取るための繰り返し質問（確認）の姿が多く見られた。そのことにより、伝え合い・聴き合いの中で自分と相手を比較しながら解決へと進んだり、学習後には、自分の思いや考えの変化にも目が向き、自らの変容を振り返ったりする姿が見られた。

<ありの行列ができるわけは何か>の学習を進める中で、繰り返し説明（言い換え）と繰り返し質問（確認）が見られた場面があった（資料7）。これは、行列ができるわけは何かを話し合っていた場面で、F児が九段落にある「わけ」という言葉に着目したところである。

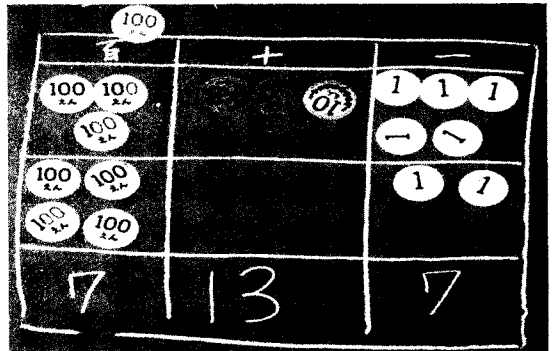
F児の意見は、九段落の最後に「・・・というわけですから」と書いてあるから、その前に書かれた「このように、においをたどって、えさのところへ行ったり、巢に帰ったりする」が「わけ」だと言いたいのである。しかし、F児より前に発言した子どもの中には九段落に着目した子どもがいなかったため、他の子どもにとっては、F児の発言が突拍子もない発言に思え、すぐには理解することができなかったようである。それでも、周りの児童の中には、G児のように、F児の言いたいことを即座に受け止めて確認の言葉を出している子どもがいた。その確認の言葉により、他の子どもも、F児の意見を理解し納得することができた。

F児：九段落に「わけ」と書いてあるから、わけはこの段落です。
 C：どういふこと。
 F児：わけを探しているから、九段落の最後に「できるというわけです。」とあるから、この段落がわけだと思います。
 C：ん？
 G児：Tさんは、文末に「というわけです。」という言葉があるから、わけだと言いたいんだよね。
 C：あ、「わけ」ってあるの、ここだけだ。
 C：本当だ。
 C：なるほど。

資料7 授業記録～「わけ」への着目

(3) 算数科「たし算とひき算の筆算」における実践

算数科の学習の中でも、自分の考えが相手に伝わるまで繰り返し説明（言い換え）を意識して取り入れてきた。特に、一人でも「わからない」という思いをもつ子どもがいるときには、何度も繰り返し説明を行ってきた。その際、一人だけで説明するのではなく、別の子どもが友達の言いたかったことを受け止めて代わりに説明する説明方法も取り入れてきた。そのことにより、伝える側の説明の仕方にも変化が見られた。指差しをしたり、図を書き加えたり、同じことを言っている途中で相手に確認をするようにしたりと、相手意識をもった説明ができるようになってきた。



資料8 繰り上がりを説明したときの板書

「たし算とひき算の筆算」において「なぜ、百の位に1とかいてよいのか」という課題で、繰り上がりの計算の仕方を学習した。計算が得意な子どもでも「なぜ」と問われるとうまく説明ができず困惑していた。

右の資料8・9は、この時間の学習の最後に、H児がお金の模型を使用して説明を行った授業記録である。百の位に1と書いてよい理由がすっかりしていない友達に対して、相手の反応を見ながら、少しずつ説明を加えている。また、「両替」という2年生での既習を活かして説明をしたことで、他の子どもも既習の学習と結びつけて考えるとよいことに気付いていった。

H児：365 + 472の計算をすると、一の位は5 + 2で7ですね。
 C：うん。そこまではわかっている。
 H児：次に、十の位の計算をすると、6 + 7は13だから、10円が13こですね。
 C：はい。
 H児：十の位には、10円が9こまでしか入らないので、この10こを両替して100円にします。
 C：あ、両替だ。2年生でやった。
 H児：100円一つを百の位に、くり上げるので、百の位の上に1と書きます。だから、1 + 3 + 4は7です。
 C：あ〜。そういうことか。

資料9 授業記録～繰り上がりの説明～

H児以外の子どもが数字のみを使用した説明であったことから、「まだよくわからない」という思いをもっている子どもがいた。しかし、「100円に両替をしたから、百の位にくり上がる」という目に見える形での説明により、「なるほど」「わかった」と子どもの表情に変化が見られた。学習後に、「Hさんの説明でよくわかった」と嬉しそうに話をしにくる子どももいるほど、学習後の自分の思いや考えの変化をはっきりと意識することができていた。

繰り返し説明により、同じ説明でもよりわかりやすく相手に伝わる方法での説明の仕方を意識することで、聴き手に思いや考えを受け入れてもらいやすくなっていた。特に、算数科では、書きながら、指しながら、自分の思考の過程を示しながらの説明が聴き手の理解を促していた。

4 今後に向けて

テーマに迫るため、三つの条件を設定し、条件に対する五つの手だてを用意して実践に取り組んできた。その結果、子どもの伝え合う・聴き合う姿に変化が現れてきた。しかし、根拠を明確にもって話したり書いたりする力をよりはぐくんでいくと同時に、子どものもつ言葉の力を高めたり、語彙を増やしたりする必要を感じている。現在の伝え合い・聴き合いが、自らの思いや考えをとらえなおし、深め・高めていくことができるような活動になるための手だてについて、今後も研究と実践を重ねていく。